

## 西南暖地の畑地帯における粗飼料生産基準

松 本 聡  
(九州農業試験場畜産部)

MATSUMOTO, S.

Outline of Cultural Method of the Forage Crops in Warm Area in Japan

### 緒 言

今回、農林水産技術会議の要せいによつて、試験研究機関の成績にもとずき、九州における粗飼料生産技術のとりまとめを行なつた。この稿はその一部であり、九州でもつとも広く栽培されている春型の青刈りエンバク、夏型の青刈りトウモロコシを記載した。

#### 1. 青刈りエンバク

(1) 品種、日向黒、パーシニアグレーおよびアルゼリ型のレッドオートは、早生、多葉性で、耐寒、耐病性が強く、再生がおう盛であるので、冬季型の青刈りに適する。また、ビクトリー1号、前進は晩生で、耐寒性は弱い、葉長、葉巾は大きく、出穂期ごろの1~2度刈りは多収であるので、サイレージ用として適する。

(2) 播種法 1) 播種期、播種期の中は広いが、年内より若刈りして利用する場合は、9~10月の早播きが適し、1~2度刈りの場合は、11月ごろの播種期でよい。また、飼料カブあるいは青刈りレーブの後作として、1月上~3月上旬に青刈りエンバクを播種し、5月下~6月上旬のかなりおそくなつてより利用することもできる。2) 播種量および播種様式、一般に播種量はa当り400~800gの中があり、畦巾60cm程度で播種される。しかし、年内より若刈りする場合は、a当り900~1,000gの厚播きで、畦巾は15~30cmの密植栽培が多収をあげる方策である。しかし、サイレージ用で刈り取り回数のすくない場合は、a当り500~600gが適量である。3) 間混作、単作のほかにもモンベッチとの間混作あるいはイタリアンライグラス、モンベッチとの3種混播が行なわれている。前者での播種量は青刈りエンバクは500~600g、モンベッチは200~300gでよく、畦巾60cm程度で条播、交ご播き、あるいは散播を行なう。また、3種混播では青刈りエンバクは、a当り300~400g、イタリアンライグラスは100~150g、モンベッチは200~300gとして散播を行なう。

(3) 施肥法、1) 施肥量、一般にa当り窒素は0.8~1.5、燐酸は0.3~0.8、加里は0.5~1.0kg程度を施用する。しかし、非火山灰土壌では窒素の多施、火山灰

土壌では燐酸、および窒素と燐酸併用の多施が効果が大きい。2) 時期 窒素、および加里は多を元肥とし、 $\frac{1}{2}$ は追肥として施用する。燐酸は全量を元肥とする。

(4) 収穫法 1) 時期、利用目的、あるいは利用時期などによつてことなる。サイレージ用は乳熟期の刈り取りが生草収量がつとも多く、質的にもすぐれておるので適当である。また播種期によつて刈り取り回数、あるいは総収量はことなる。中部では同一播種期の場合は、若刈りの2~3度刈りの総収量は、乳熟期ごろに刈り取つた1度刈り収量よりもすくない。しかし、おそ播きした1度刈り収量よりも多い。南部では同一播種期の場合でも、若刈りの2~3度刈りの総収量は1度刈り収量に比らべて差がない。2) 刈り取りの高さ、生育期間中に2~3回の若刈りを行なう場合には、地際よりの刈り取りの高さが問題になる。その高さは生育の時期によつてもことなるが、すくなくとも地際より10cm以上で刈り取り、節間伸長後はさらに高刈りが適当である。3) 収量、青刈りはa当り300~400kg、サイレージ用は400~500kgである。

#### 2. 青刈りトウモロコシ

(1) 品種 晩生の大デッチ、およびホワイトデントコーンが多収で、これについてトウモロコシ交1号、および長交161号が適する。

(2) 播種法 1) 播種期、4月上~8月下旬まで、播種期の中はきわめて広い。しかし各地帯とも5月中~6月中旬播種が多収である。これより早い播種期では、イネヨトウの被害が大きく、おそくなるとアヲトウの被害により減少する。2) 播種量、および播種様式、利用目的、あるいは利用時期によつてことなる。出穂前より若刈りを行ない、多収をあげるためには、播種量を多くし、栽植密度を高くしなければならない。一般に青刈りの播種量は、a当り500~900gであり、畦巾60cm程度に条播する。しかし、突風、あるいは降雨によつて倒伏するか、しないかの限界栽植密度は、畦巾45~60cmで、株間15cmに1株2本立てとした場合であると考えられる。その場合のa当り株数は2,160~2,880本であり、播種量にすればa当り約

600~700gである。サイレージ用は畦巾75~90cm程度とし、株間30~45cmの1株2本立てが多収であり、播種量にすればa当り140~180gである。3) 間混作、単作のほかに質を高めるために青刈りダイズ、あるいはカウピーとの間混作が広く行なわれている。その場合の播種量は、青刈りトウモロコシはa当り400~500g、青刈りダイズは200~300g、カウピーでは200~250gを、畦巾60cmに混条播する。

(3) 施肥法 1) 施肥量、一般にa当り成分量で窒素は0.6~1.5、リン酸は0.3~0.8、加里は0.5~1.3kg施用する。

しかし、非火山灰土壌において多収をはかるためには、窒素は1.2~1.5、リン酸は0.6~0.8、加里は1.0~1.3kg程度の多施がのぞましい。2) 時期、窒素の $\frac{2}{3}$ は元肥とし、 $\frac{1}{3}$ は播種後40日ごろに追肥する。加里は $\frac{2}{3}$ は元肥で、残り $\frac{1}{3}$ は追肥する。リン酸は全量を元肥とする。

(4) 収穫法 1) 時期、利用目的によつてことなり、青刈りの場合は雄穂抽出期前後であり、サイレージ用は糊熟期~硬化初期が適期である。2) 収量、青刈りはa当り400~600kg、サイレージ用は500~750kgである。